

## 専任教員教育研究業績

平成28年6月28日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
宇佐美 かおる	うさみ かおる	保育学科	准教授	女
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等	
健康指導法、健康・スポーツ理論、健康・スポーツ実技、教育実習指導、卒業論文ゼミ			安全衛生委員	
学 歴				
和暦（西暦）年 月	事 項		学位	
S59年3月	東京学芸大学 教育学部初等教育教員養成課程卒業		教育学士	
S61年3月	東京学芸大学大学院教育学研究科 修士課程修了		教育学修士	
H18年12月	玉川大学文学部教育学科通信教育課程（科目等履修生）受講修了			
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容		
尚美学園短期大学	S61年4月～H8年3月	助手（S61年4月～S62年3月）、専任講師（S62年4月～H8年3月） 「体育実技」「体育講義」		
津田塾大学	S61年4月～H20年3月	非常勤講師 「動きの教育」「スポーツと身体スキル（硬式テニス）」「コンディショニング」		
共立女子体育大学	H3年4月～4年3月	非常勤講師 「体育実技（卓球）」		
日本女子大学	H10年4月～24年3月	非常勤講師 「身体運動Ⅰ（テニス）」（H20年4月～21年3月を除く）		
駒沢女子短期大学	H12年4月～24年3月	非常勤講師 「体育実技（バレーボール、バドミントン、バスケットボール、ミニスポーツ）」「体育講義」		
お茶の水女子大学	H14年4月～24年3月	非常勤講師 「スポーツ健康実習（フィットネストレーニング、硬式テニス）」（H20年4月～21年3月を除く）		
和泉短期大学	H18年4月～20年3月	非常勤講師 「子どもと健康」		
明治薬科大学	H20年4月～22年3月	非常勤講師 「体育実技（卓球、バドミントン）」		
豊島区役所	H20年9月～24年3月	豊島区生涯学習指導員		
駒沢女子大学	H21年4月～24年3月	非常勤講師 「スポーツⅠバドミントン、バスケットボール、バレーボール、ミニスポーツ」		
立教大学	H21年4月～24年3月	非常勤講師「スポーツスタディ（テニス、卓球）」		
立教大学院短期大学	H21年4月～現在まで	非常勤講師「体育（テニス、バスケットボール）」		
お茶の水女子大学附属高等学校	H21年4月～24年3月	非常勤講師「体育（テニス、バスケットボール）」		
小田原女子短期大学	H24年3月～現在まで	准教授 健康指導法 身体表現Ⅰ・Ⅱ 卒業論文ゼミ 教育実習指導		
洗足こども短期大学	H27年4月～現在まで	非常勤講師「保育内容 健康」		
所 属 学 会 等				
名 称	活動期間	活動内容（役職等の活動を含む）		
日本体育学会	S59年4月～現在に至る	大会参加・発表		
東京体育学会	S59年4月～現在に至る	大会参加・発表		
日本バイオメカニクス学会	S59年4月～現在に至る	大会参加・発表		
日本体力医学会	S59年6月～現在に至る	大会参加・発表		
日本保育学会	H19年5月～現在に至る	大会参加・発表		
日本発育発達学会	H25年1月～現在に至る	大会参加・発表		
社 会 活 動 等				
名 称	活動期間	活 動 内 容		
豊島区生涯学習指導員	H20年9月～24年3月	豊島区生涯学習指導員として豊島区文化商工部学習・スポーツ課スポーツ振興グループに所属し、豊島区におけるスポーツ推進活動に関わった。		

担当教科目に関する資格・免許等				
名称	取得年月	取得機関		
小学校教諭一級普通免許	S59年3月	東京学芸大学		
中学校教諭一級普通免許	S59年3月	東京学芸大学		
高等学校教諭二級普通免許	S59年3月	東京学芸大学		
高等学校教諭一級普通免許	S61年3月	東京学芸大学大学院		
幼稚園教諭2種免許	H18年12月	玉川大学通教育課程		
保育士資格	H27年2月	東京都資格試験		
研究実績に関する事項				
代表的な著書、論文等の名称	単著 共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1.大学生のための保健体育教本の保健体育教本	共著	H1年3月	道和書院	大学生の保健体育理論の学習に供することを目的に、保健体育に関する基礎的、一般的内容を含みかつ幼児教育的な情報も加味してまとめたものである。 A5版 全126頁 編者：宇佐美茂 共著者：宇佐美茂、鈴木武文、幾島正、山城屋正満、宇佐美かおる 本人担当部分：「IV幼児の遊びと体育」(pp.35~47)の図表掲載に関して検討を加えた。
2.体育実技	共著	H3年3月	犀書房	大学教育における健康教育として組み込まれているスポーツに関する歴史やルール、実施の方法などについて解説したものである。 A5版 全250頁 編者：宇佐美茂 共著者：宇佐美茂、幾島正、山城屋正満、宇佐美かおる 本人担当部分：「硬式テニス」(pp.34-45)「バドミントン」(pp.56~68)について、歴史、特徴、用具、ゲームの進め方、ルールについて解説したものである。
3.スポーツを知る・する・考える	共著	H7年3月	不昧堂出版	スポーツを知りたい、スポーツをやってみたい、スポーツとは何なのかを知識として理解しようとする人を対象に、さまざまな角度からスポーツに対するアプローチができるような内容を盛り込み、理論と実践の両面にわたって役立つような幅広い内容となっている。 A5版 全175頁 編者：スポーツ実践研究会 共著者：森敏生、岡本悌二、長谷川裕、吉田清司、綿引和美、須田和也、財部重孝、佐藤雅幸、高橋伸次、宇佐美かおる、本間正行、時本久美子、柳井義裕、重村博美、宇佐美隆憲、時本識資、高田正義 本人担当部分：第3章「トレーニングの組み立て」2節「トレーニングの種類と方法」3「コンディション・コーディネーションのトレーニング」(pp.102~109)の概念およびそのトレーニングの種類・内容について解説したものである。
4.楽しく遊んで体づくり！幼児の運動遊び「幼児期運動指針」に沿	共著	H27年1月	チャイルド本社	文部科学省の定めた「幼児期運動指針」に沿った形で、運動遊びについて提案したもの。特に、既存の運動遊びを多様化させるためのアレンジの視点や変化の工夫などについて実践例を掲載。

<p>つて</p> <p>5. 保育の心理学</p>	<p>共著</p>	<p>H27年4月</p>	<p>青踏社</p>	<p>共著者：吉田伊津美、宇佐美かおる、内田裕子、塩野谷祐子、鈴木康弘、町山太郎          本人担当部分：アレンジの協議、検討、アレンジ提案及び作成（かけっこ、どんじゃんけんぼん、縄とびこし、しっぽとり、おいもごろごろ、リズムダンス、先生を引っ繰り返せ）</p> <p>保育者、施設職員等を目指す学生を対象とした子ども理解を進めるための保育の心理学としての提案書。          I 基礎編では発育発達について、II 実践編では、心理・発達の観点からまとめたものである。</p> <p>共著者：宮川萬寿美、神蔵幸子、宇佐美かおる、金澤久美子、片山伸子、小倉直子          本人担当部分：基礎編第3章第1節</p>
<p>(学術論文)</p> <p>1. 児童の筋出力特性について</p> <p>2. Squat Jumpにおける膝角度と下肢筋力特性の関係について</p> <p>3. 児童の背筋力と握力の異同に関する研究</p> <p>4. アイソメトリック収縮時における能動的と受動的筋出力特性の差異について (修士論文)</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>単著</p>	<p>S59年10月</p> <p>S60年10月</p> <p>S60年12月</p> <p>S61年3月</p>	<p>体力科学 Vol.33-5 pp.251-252</p> <p>東京学芸大学紀要 第5部門 芸術・体育 第37集 pp.223-229</p> <p>体力科学 Vol.34 Suppl. pp.79-87</p> <p>東京学芸大学修士論文</p>	<p>動的、静的筋力の測定により児童の筋出力特性を検討した。対象は小学生児童1～6年生で反復握力、背筋力と脚筋力、能動筋力と受動筋力、垂直とび、上体そらしの5項目について測定した。</p> <p>各測定項目について男女差はほとんどみられなかった。筋力発揮の持久性をみた反復握力に関しては、各学年とも70～80%の維持率を示した。また、受動的に発揮させられる筋力に関して、受動握力が能動握力の170～205%の比率を示し、低学年ほど大きな値を示し、女子が男子より高い値を示す傾向がみられた。負荷をかけた上体そらしでは男子の測定値が女子より有意に高かった。これらのことから、筋力の発達差、男女差等を考慮し、指導にあたる必要性のあることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：測定、データ集計および分析          共著者：朽木勤、宇佐美かおる、竹倉宏明、宮崎義憲</p> <p>大学生男子バレーボール部員を対象に種々の膝屈曲角度における Squat Jump を行わせ、その際の地面反力記録と膝角度変位記録の分析から膝関節屈曲角度と下肢筋群の筋出力特性との関係について検討した。</p> <p>その結果膝角度の増大に伴う筋出力特性の変化として、踏み切り時間の延長、最大踏み切り力の減少および踏み切りの力積の不変傾向が示された。</p> <p>本人担当部分：測定、データ集計および分析          共著者：宮崎義憲、朽木勤、宇佐美かおる、竹倉宏明</p> <p>小学生児童を対象とし握力や背筋力を中心としたいくつかの筋力測定を同一個人に実施し、その測定結果を握力と背筋力の異同という観点から検討した。</p> <p>その結果、背筋力と能動握力あるいは受動握力には有意な相関を認めたが、その相関関数は能動握力より受動握力のほうが低いことが示された。</p> <p>本人担当部分：測定、データ集計および分析          共著者：宮崎義憲、朽木勤、宇佐美かおる、竹倉宏明</p> <p>大学生男子を対象にアイソメトリック収縮時における能動および受動上腕屈曲力を測定し、その筋出力特性の差異について筋電図学的に分析した。</p> <p>その結果、筋力発揮に際して能動と受動では運動単位の参加頻度数が異なることにより差異が生ずることが考えられた。</p>

5. 垂直とびにおける巧みさと下肢筋力の発達について	共著	S61年10月	第8回日本バイオメカニクス学会大会論集 Pp.21-24	5歳から20歳までの男女を対象として、垂直とびの跳躍動作における巧みさと下肢筋力の発達について検討した結果、垂直とびにおいて腕の振り込みや膝の反動動作などを跳躍に有効に作用させる巧みさは、5～6歳と14～15歳、垂直とびの踏み切りにおける下肢伸展筋群の筋力集中発揮能力は、12～13歳頃にそれぞれ著しい発達が示された。 本人担当部分：測定、データ集計および分析 共著者：宮崎義憲、宇佐美かおる、岡部洋、井上直子
6. 幼児のSquat Jumpにおける下肢筋出力特性について	共著	S62年2月	財団法人 体育科学センター「体育科学」第14巻	幼児と大学生を対象とし異なる膝角度からの Squat Jump を行わせ、その際の鉛直方向地面反力と膝の角度変位記録から、大学生と幼児との差異を比較することにより幼児の Squat Jump における下肢筋力発揮特性について検討した。その結果、幼児では跳躍前において下肢伸展筋群が強く予備緊張された場合には、むしろその筋力発揮能力は低下することが示された。 本人担当部分：測定、データ集計および分析 共著者：宮崎義憲、宇佐美かおる、岡部洋、井上直子
7. 硬式テニスの各種ストロークの呼吸相について	共著	S62年10月	東京学芸大学紀要 第5部門 芸術・体育 第39集 pp.231-238	大学硬式テニス部員を対象に硬式テニスにおける各種ストロークを行わせ、その際のインパクト時点と呼吸相との関係について検討した。 その結果、フォアハンドストローク、サービス、およびスマッシュでは、吸気相から呼気相への転換相あるいは呼気相においてインパクト時点がみられ、バックハンドストローク、フォアハンドおよびバックハンドボレーでは一定の傾向は見られなかった。 本人担当部分：測定、データ集計および分析 共著者：宮崎義憲、宇佐美かおる、岡部洋、井上直子
8. 受動筋力におけるトレーニング効果に関する一考察	単著	S63年6月	尚美学園短期大学研究紀要 第2号 pp.89-113	大学生男子を対象に一般的なトレーニングが受動筋力に及ぼす影響について上腕屈曲力を測定することにより検討した。 その結果アイソメトリック収縮での能動的な筋力による上腕屈曲トレーニングでは、能動および受動上腕屈曲力ともにトレーニング開始時よりも約20%の増加が認められた。
9. 本学学生の健康度指標化の試み	単著	H6年3月	尚美学園短期大学研究紀要 第8号 pp.117-139	本学女子学生の健康に対する意識を健康、食、生活習慣、運動習慣の観点から調査し、本学学生の健康度指標化への基礎資料を得ようとしたものである。健康については約9割の学生が平均3.1件の不定愁訴を訴えている。食については偏食傾向が目立ち、実際の食行動も栄養面の軽視などがみられた。生活パターンは夜型が多く、運動については実践よりも観賞する傾向が強く見られた。
10. 専攻別にみた女子大生の健康に関する意識と行動について	共著	H7年4月	体力研究 第89号 pp.32-39	首都圏に位置する大学・短大の1・2年生女子を対象に健康に関する調査を行い、身体、生活、食、運動の側面から健康意識と行動について専攻別に検討した。 その結果、健康に対する自己評価は専攻による違いは認められなかった。健康に対する知識、生活習慣、食に関しては、専攻による違いが認められた。このことから、健康や食に関する指導には専攻意識を絡めた指導内容の検討が必要であることが示唆された。 本人担当部分：測定、データ集計および分析

11. プロトコル分析からみた投動作と打動作の類似性	共著	H17年3月	津田塾大学紀要 No. 37. pp.43-56	<p>共著者：井上直子、宇佐美かおる、湊久美子、西島洋子、坂木佳寿美</p> <p>成人女性の投能力の基礎資料を得るために、投動作と打動作の画像分析と観察的評価に加えプロトコルを採取し、両動作の類似性を検討した。</p> <p>その結果、両動作の基本フォームは同じであるが、道具を用いることによって意図的にフォームを変化させていることが明らかになった。</p> <p>本人担当部分：投、打動作の画像分析および観察的評価を担当 共著者：井上則子、宇佐美かおる</p>
12. 駒沢女子短期大学生の運動、健康、食習慣およびサプリメントに関する意識について	共著	H19年3月	駒沢女子短期大学紀要 40号 pp.33-39	<p>駒沢女子短期大学保育学科1年次生を対象として、運動や栄養に関する意識の実態を把握し、今後の指導の一助とするための基礎資料を得ること、また、保育者を志す学生の実態を把握することを目的として、運動、健康意識、食習慣、サプリメントの利用の観点から意識調査をおこなった。その結果、運動定期的に実施する習慣を持つ学生は多くは見られず、サプリメントに利用についてもその効果を強く感じている者は多くはなかった。</p> <p>本人担当部分：アンケート実施および集計・分析、論文執筆を担当 共著者：宇佐美かおる、三辻浩子、木下茂昭</p>
13. 駒沢女子短期大学生の運動、健康、食習慣およびサプリメントに関する意識について (第2報)	共著	H20年3月	駒沢女子短期大学紀要 41号 pp.21-34	<p>駒沢女子短期大学保育学科1年次生を対象として、運動や栄養に関する意識の実態を把握し、今後の指導の一助とするための基礎資料を得ること、また、保育者を志す学生の実態を把握することを目的として、運動、健康意識、食習慣、サプリメントの利用の観点から意識調査をおこなった。その結果、運動定期的に実施する習慣を持つ学生は多くは見られず、サプリメントに利用についてもその効果を強く感じている者は多くはなかった。</p> <p>本人担当部分：アンケート実施および集計・分析、論文執筆を担当 共著者：宇佐美かおる、三辻浩子、木下茂昭</p>
14. 駒沢女子短期大学生の運動、健康、食習慣およびサプリメントに関する意識について (第3報)	共著	H21年3月	駒沢女子短期大学紀要 42号 pp.21-28	<p>本調査では、これまでの筆者らの調査に体力測定を加え、基礎資料の充実を図ることを目的とした。その結果、運動習慣のない学生が多く、健康に関心はあるが、自信のある学生は多くなかった。また、運動習慣のあることが基礎体力の維持につながっていることが示唆された。サプリメントを知っている学生は全体の半数を超えるが、利用している学生は多くなかった。</p> <p>第1・2報および今回の調査および測定において、学生の実態が見えてきてはいる、これらの現状をふまえ学生に日常の運動習慣やバランスのとれた食生活をこころがけることの意識を定着させることが今後の課題である。限られた時間のなかで、生涯学習として学生が生活習慣や運動を理解できるよう指導にあたっていきたい。</p> <p>本人担当部分：アンケート実施及び集計・分析、論文執筆を担当 共著者：宇佐美かおる、三辻浩子、木下茂昭</p>
15. 駒沢女子短期	共著	H22年3月	駒沢女子短期大学紀	<p>本調査では、駒沢女子短期大学保育科学の保育者を</p>

<p>大学保育科学生の健康と体力の関係について</p>			<p>要 45 号 pp.49-52</p>	<p>志す学生の健康と体力に関する意識調査および体力を測定することで学生指導の基礎資料の充実を図ることを目的とした。その結果、健康や体力に関する自信の無さが明らかになった。また、生活習慣の不規則な学生が多く見られた。しかし、体力値からみると基礎的な体力の大きな落ち込みは見られなかった。これは、週 1 回でも体育実技の授業が定期的な運動習慣としての意味を持つであろうことが推測された。しかし、生活習慣の不規則な点を考えると指導の内容として、生活習慣の適正化や運動習慣の定着化を含める必要のあることが示唆された。 本人担当部分：アンケート実施及び集計・分析、体力測定および測定値集計、論文執筆を担当 共著者：宇佐美かおる、三辻浩子、木下茂昭</p>
<p>16. 小田原女子短期大学学生の体力と生活習慣の関係について</p>	<p>共著</p>	<p>H26 年 3 月</p>	<p>小田原女子短期大学研究紀要第 44 号 pp.60-63</p>	<p>本調査では、小田原女子短期大学学生の生活習慣に関する意識調査および体力を測定することで学生指導の基礎資料の充実を図ることを目的とした。その結果、健康や体力に関する自信はある程度持っていることが分かった。しかし、体力値は全体的に低く、自覚と実態にずれがあることが気になる点としてあげられる。また、ほとんどの学生が運動をする習慣がなかった。これらのことから、今後、健康、体力に関する正しい理解を促すと同時に、学生が運動しやすい環境を設定し、運動機会の提供を含める必要のあることが示唆された。 本人担当部分：アンケート実施及び集計・分析、体力測定および測定値集計、論文執筆を担当 共著者：宇佐美かおる、木戸直美、白澤貴子</p>
<p>17. 地域子育てひろばを活用した乳幼児家庭全戸支援(1)～小田原モデルの研究と試行～</p>	<p>共著</p>	<p>H27 年 3 月</p>	<p>小田原短期大学研究紀要第 45 号 pp.50-63</p>	<p>こんにちは赤ちゃん事業が開始されているが、全戸支援にまでは至っておらず、支援の行き届いていない家庭も全体の約 8 割あると考えられている。本研究では、自治体と連携した全戸支援を目指すために、ひろばの活用・運営などを検討し、子育て家庭の地域とのつなぐための方策を検討したものである。 共著者：吉田眞理、今泉明美、稲葉佳代子、内山麻子、宮川萬寿美、宇佐美かおる、菊地篤子、野津直樹、金澤久美子</p>
<p>18. 子どもの発達を総合的に促す保育活動の研究(1)～箱根町よさこいソーラン踊りを通して～</p>	<p>共著</p>	<p>H27 年 3 月</p>	<p>小田原短期大学研究紀要第 45 号 pp.78-80</p>	<p>最近の子どもの特徴として体力低下が指摘され様々な取り組みも行われている。本研究では、保育活動の中によさこいソーラン踊りを導入している箱根町保育所をモデルとして、子どもの発達とも関連を見ることを目的とした。今回の調査では、地域との連携の中、子どもたちの変化の様子を観察するための環境についてまとめたものである。 共著者：宮川萬寿美、宇佐美かおる、東元りか 本人担当部分：Ⅱ、Ⅲ-3・4</p>
<p>19. 子どもの発達を総合的に促す保育活動の研究</p>	<p>共著</p>	<p>H28 年 3 月</p>	<p>小田原短期大学研究紀要第 46 号 pp.109-115</p>	<p>筆者らの前回の調査では、地域との連携の中、子どもたちの変化の様子を観察するための環境についてま</p>

<p>(2) ~箱根町よさこいソーラン踊りを通して~</p> <p>6. 過去3年間の小田原短期大学学生の体力と生活習慣の現状報告</p>	<p>共著</p>	<p>H28年3月</p>	<p>小田原短期大学研究紀要第46号 pp.82-87</p>	<p>とめた。本著では、前回の指導状況、指導環境をふまえて、地域指導者、保育者からの聞き取り調査を実施した。その結果、指導者と園、指導者と保育者相互の連携により、地域の文化に触れながら、子どもたちの発育発達を促すことにつながっていることが示唆された。</p> <p>共著者：宇佐美かおる、東元りか、宮川萬寿美 本人担当部分：Ⅱ、Ⅲ-1・2・3(1)①~⑤・(2)・Ⅳ</p> <p>本調査では、過去3年間の小田原短期大学学生の体力と生活習慣に関する調査をまとめ傾向把握を試みた。その結果、各年度の特徴は、ほぼ同傾向を示した。この傾向を、小田原短期大学に所属する学生の特徴として受け止め、今後は、この特徴を伸長あるいは改善するプログラムを検討すること、また環境を整える必要性等が示唆された。</p> <p>本人担当部分：アンケート実施及び集計・分析、体力測定および測定値集計、論文執筆を担当 共著者：宇佐美かおる、木戸直美、白澤貴子</p>
<p>(その他) ・口頭発表 1. 児童の跳躍動作における協応能の発達について 2. 背筋力の出力制限因子に関する分析的検討 3. 能動握力と受動握力の発達</p>	<p>共同  共同  共同</p>	<p>S59年9月  S59年10月  S60年9月</p>	<p>第39回日本体力医学会  第35回日本体育学会  第40回日本体力医学会</p>	<p>小学生1~6年生までの児童を対象とし、いくつかの条件による垂直とびを行わせ、その際の地面反力記録を分析することにより児童の跳躍動作における協応能と筋出力の発達について検討した。</p> <p>その結果、児童期における跳躍動作の協応能や筋出力は、加齢とともに徐々に発達し、特に男子では中学年ごろから腕の共応能の発達が著しくなることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析 共同発表者：宮崎義憲、朽木勤、宇佐美かおる、竹倉宏明</p> <p>大学生男子を対象に上体前傾角度を変化させて背筋力を測定するとともに、背筋力発揮中の姿を写真分析により検討し、背筋力の出力制限因子を明らかにしようとした。</p> <p>その結果より、一般の背筋力測定では上体の前傾角度が小さく、上部背筋群が主働筋として作用するため高い値となり、文部省実施要領に正しく準拠した測定では、主働筋が下部背筋群となるため筋出力が制限され低い値を示したことが考えられる。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析 共同発表者：宮崎義憲、朽木勤、宇佐美かおる、竹倉宏明</p> <p>5歳~74歳に至る男女を対象に能動握力と受動握力を測定し、両握力の発達について検討した。</p> <p>その結果、女子は能動的な筋力発揮より受動的な筋力のほうが男子に対して相対的に優勢であること、また男女ともに受動握力は幼児の時点で比較的大きな発達をなしていることなどが考えられた。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析 共同発表者：朽木勤、宇佐美かおる、宮崎義憲</p>

4. 幼児のSquat Jumpにおける筋出力特性について	共同	S60年9月	第40回日本体力医学会	<p>幼児男女を対象に両手を体側につけたまま膝角度を、110度、90度、70度にした状態での垂直とびおよび負荷を用いた状態での垂直とびを行わせ、大学生男女を対照群として比較検討したところ、幼児は下肢筋群の筋出力における集中発揮能力が未熟な段階にあることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析 共同発表者：宮崎義憲、宇佐美かおる、竹倉宏明、井上直子、岡部洋、江口淳一</p>
5. 発育期における静的筋力と動的筋力の発達について	共同	S60年9月	第40回日本体力医学会	<p>小学生を対象に筋力を静的なもの動的なものにわけて測定し、その年齢発達の過程を観察することを目的とした。</p> <p>その結果、静的筋力と動的筋力は、同様の発達傾向を示すが相関関係に一定の傾向がみられないということから、静的筋力と動的筋力とは、筋出力様式における発達の違いによると考えられることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析及び考察、まとめ、口頭発表 共同発表者：宇佐美かおる、井上直子、岡部洋、江口淳一、宮崎義憲</p>
6. 地面反力からみた垂直とびの発達に関する検討	共同	S60年10月	第36回日本体育学会	<p>小・中学生および高校生に対しいくつかの条件による垂直とびを行わせ、その際の地面反力記録を記録した。その記録より、重心の跳躍高、踏切時の力学的パワー、力積などを導き出し、その結果を発育発達の分析した。</p> <p>その結果13歳以降の思春期における跳躍高の男女差は、主に腕の振込みや膝の反動などによるスキルの要因よりも脚のパワーの発達差によることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析 共同発表者：宮崎義憲、宇佐美かおる、井上直子、岡部洋</p>
7. 背筋力測定時における体幹背筋群の諸活動について	共同	S60年10月	第36回日本体育学会	<p>背筋力の測定において測定条件を変化させ体幹背筋群の筋電図を記録し、その筋電図記録より条件の変化にともなう、体幹背筋群の筋活動および筋の出力特性について分析検討した。</p> <p>その結果、体幹背筋群の筋活動様式の差異は個人差によるものが大きく、背筋力の優劣によるものだけでは考えられないことが示唆された。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析 共同発表者：宮崎義憲、宇佐美かおる、井上直子、岡部洋</p>
8. 専攻分野別女子大生の健康意識と日常生活の特性	共同	H4年12月	第43回日本体育学会	<p>首都圏に位置する大学・短大の1・2年生女子を対象に健康に関する調査を行い、身体、生活、食、運動の側面から健康意識と行動について専攻別に検討した。</p> <p>その結果、健康に対する自己評価は専攻による違いは認められなかった。健康に対する知識、生活習慣、食に関しては、専攻による違いが認められた。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析、まとめ、口頭発表 共著者：宇佐美かおる、井上直子、湊久美子、西島洋子、坂木佳寿美</p>

9. 学習者はどのようにパフォーマンスを変容させるのか？	共同	H19年9月	第 58 回日本体育学会	<p>成人女性の投能力の基礎資料を得るために、投動作と打動作の画像分析と観察的評価に加えプロトコルを採取し、運動習熟度との関連性を分析した。その結果、運動学習過程において学習者は明確な意図を持って、自己のパフォーマンスを変容させていることが明らかになった。</p> <p>本人担当部分：投、打動作の画像分析および観察的評価を担当 共著者：井上則子、宇佐美かおる</p>
10. 市川市における働き盛り世代の運動行動と健康度について	共同	H20年3月	第142回日本体力医学会関東地方会	<p>市川市の働き盛り世代を対象にした健診結果及びアンケート調査を分析検討することにより、生活習慣病予防のための基礎資料を得ることを目的とした。その結果調査対象者の約半数が週に1回以上、30分以上の運動を習慣的に実施していた。また中学、高校時代のスポーツ経験が各年代におけるスポーツ・運動習慣につながっていた。さらにスポーツや運動を経験あるいは実施している人は、食事のバランスが良い状況であった。日常生活における活動度が高いとBMI、血中中性脂肪の値とも良い値を示す傾向がみられた。これらのことから、スポーツや運動を習慣的に実施することが日常生活における身体活動も活発化し、その結果、充実した食行動につながる可能性が高く、それが生活習慣病の予防への第一歩となることが示唆された。</p> <p>担当部分：データ集計・分析および考察、まとめ、口頭発表 共著者：宇佐美かおる、上野祐紀子、北村裕美、湊久美子</p>
11. 市川市における働き盛り世代の現在の運動行動と運動経験の関係	共同	H20年5月	第 15 回日本健康体力栄養学会	<p>市川市の働き盛り世代を対象にした健診結果およびアンケート調査より、生活習慣病予防のための基礎資料を得ることを目的とした。対象者は、20歳代を最低とし、年齢低下あるいは年齢上昇にあわせ、運動する傾向がみられ、過去の運動経験が現在の運動習慣につながることを示された。また、現在、運動習慣のある対象者がBMI、血中中性脂肪値ともよい値を示す傾向がみられた。これらのことから、スポーツや運動を習慣的に実施することが生活習慣病予防への第一歩となること、そのためには過去に運動経験を持つことが大きな動力となるため、学校教育期間の積極的な運動指導の必要性が示唆された。</p> <p>担当部分：データ集計・分析および考察 共著者：上野祐紀子、宇佐美かおる、北村裕美、湊久美子</p>
12. 「健康」「人間関係」授業での指導計画案作成の基礎づくり	共同	H28年5月	日本保育学会第69回大会	<p>養成校における5領域の指導法授業における初期段階の指導法を検討することを目的とした。指導案作成につながる前段階としてのプロセスを、「健康」「人間関係」指導法の授業内で、プログラム立案としてグループ活動課題として、それぞれの指導内容を生かしたアプローチで学生に声掛けをした。実施時期が1年前期(入学後3か月)ではあったが、導入・展開・まとめを意識して立案に臨んでいた。ただ、ねらいの設定では、子どもの実態や場面の想定をするための経験がまだ不足しているため、「言葉かけ」の検討が重要であると感じた。今後、他の領域とも連携を図り、学生の理解を促し、意欲を高めていきたい。</p> <p>担当部分：「健康指導法」の分析 共著者：菊池篤子、宇佐美かおる</p>
その他 (表彰等)				なし